

播磨国平津庄と生石神社の梵鐘

「石の宝殿」で知られる生石神社は、中世では長講堂領平津庄とよばれた地域に属していました。長講堂とは、後白河法皇が御所である六条殿内に設けた持仏堂のことで、その名称は、法華長講弥陀三昧堂を略したものです。ここでは、法華経の長日不断講読が行われ、その経費にあてるため、鎌倉時代初めには三カ国に計八八カ所の所領があったとされています。これが長講堂領とよばれるもので、播磨国には平津庄のほか、菅生庄や松井庄の名が知られています。平津庄は室町時代に入っても、長講堂領として「年貢米五十石」を負担していたことが確認できます。

さて、応永二六年（一四一九）八月、播磨国守護赤松氏の被官であった小河玄介が願主となって鑄造された梵鐘には、「播州印南郡平津庄生石社」と刻まれています。冒頭の記述は、この銘文の記載によったものです。ところで、

この梵鐘は、現在岐阜県大垣市の安楽寺に保管されています。安楽寺は、関が原合戦前夜まで東軍の拠点となったとされる岡山（お勝山）の山麓にあります。安楽寺に伝来する理由として『大日本金石史』（一九二一年刊）は、関が原合戦で西軍として戦った大谷吉継の陣鐘として用いられ、合戦後に徳川家康から安楽寺に寄進されたという説を紹介しています。しかし、いつ、どのような理由で播磨から美濃へ移ったのかについては、いまだ謎として残されているのです。

（高砂市史編さん専門委員
梶木良夫）



（大垣市 安楽寺の梵鐘）